

第 1412 回 (1 月 24 日)

## 国際比較からみた日本家族の構造

(元東京大学東洋文化研究所)

中 根 千 枝

家族は人間にとって最も古く、かつ普遍的な制度である。そして、人間の家族は夫婦という単位が長く続くところに他の動物と違う特徴を見い出せる。育児期間の長さがその原因だと思われる。この家族は、人間にとって最も基本的でかつ最小の集団と言うことが出来る。

最も一般的な家族の形態は、両親がいて子供がいるという基本形態——いわゆる核家族——である。ただ、家族の形態にも社会によりバリエーションがある。家族形態としてはどの社会でも統計上この基本形態が多いが、それぞれの社会で家族とはこうあるべきだと思っている理想型は違っているのである。基本形態が多いのはそれが便利だからである。妻と子を養うくらいは比較的容易だし、親子の単位を長期に継続する上で、公認された性生活も出来るし、子孫をつくる単位でもある夫と妻の組み合わせが良いのである。

家族形態のバリエーションの第 1 は大家族である。旧大陸の中心部、中国・インド・ロシア、西欧では、フランス・イタリア・ユーゴスラビアなどに分布している。大家族は、男子が生家に残り妻をよんで子供をつくることにより形成される。3 代位で 30~40 人の規模にはすぐになってしまうのである。

形態のバリエーションの第 2 は小家族である。西欧ではイギリス、アジアではスリランカのシンハリーズなどに見られる。これは夫婦は一組以上は同じ家に住まないというゴールデンルールがあるからである。

バリエーションの第 3 はどうしなればいけないのかのきまりのある家族である。例えば日本の伝統的な家族は長男 1 人しか家に残れない。そこへ配偶者がくるので一世代一夫

婦という家族形態をとることになる。

旧大陸の諸民族は大家族と言うが、その全体社会に占める割合は 10~20% で、残りは小家族である。ただ、住居や経済余裕、家族構成などの条件さえ整えば大家族形態をとるのが理想と考えられており、またその現われ方が局部的でない場合、その社会は大家族制と判断されるのである。

ところで、以上の家族 3 形態にあてはまらないもう 1 つの形態がある。それは東南アジアに広く分布する形態で、個人が自由に家族を形成するのである。基本は小家族だが、やり手が出てくるとその人を中心に大家族が出来たりするのである。だからこれは制度とは言えない。東南アジアは 1 世紀位前までは土地が豊かで気候も恵まれていたようだ。食べるのに困らない社会ではあまりきつい制度は発達しないのである。

日本はもともと東南アジア型であったと考えられる。しかし 18 世紀以降土地不足となり、いったん土地を持つとその既得権が重視されるようになる。土地や財産を何とか保持しようという要求から家制度が発展してきたのである。家制度の社会関係の特徴は、兄弟関係がなおざりにされ、親子関係が尊重されることである。同資格者どうしの横関係より、序列に沿った縦関係がより強く機能する社会的土壌がそこに成立するのである。

けれども、西欧諸国の多くもまた 18 世紀以降人口増加と土地不足に悩んできたが、日本のような家族制度は発達していない。従って、経済とか政治的な条件だけではなく、各社会には核として固有の社会的観念（例えば、中国では兄弟は同等という観念）があり、それが経済的、政治的土壌の中で培われ特有の家族構造に発展したのだと考えられる。

(文責・相川良彦)